

室 遺 跡

第 72 次調査報告書

2013・3

滋賀県長浜市教育委員会

序 文

滋賀県の北東部に位置する長浜市は、近畿・北陸・東海の交通の要衝にあたり、古くよりこの3地域を中心とした様々な文化が織り成す、数多くの文化遺産があることで知られています。これらの先人たちが残した文化遺産は、市民だけではなく、広く多くの人びとに開かれた共有の財産であります。

私たちの生きる現代は、物や情報があふれ、大変豊かで便利な時代である反面、自然や物の大切さ、伝統や歴史を重んじる心などが希薄になりつつある時代であるといえます。

このような時代に生きる私たちであるからこそ、先人たちの築いてきた歴史や文化を見つめなおし、その中に生きる先人たちの知恵を学ぶ必要があるのではないのでしょうか。

長浜市教育委員会では、これらを現代に生かし、なおかつ未来に向けて末永く伝え残していくため、文化財の保護・活用・啓発などに日々努めております。

本報告書は、24年度に実施した、室遺跡の発掘調査報告書です。室遺跡は縄文時代から中世の集落跡として周知されている遺跡です。過去に数次の調査が行われており、縄文時代の集落跡や埋甕、多数の掘立柱建物跡など、多くの調査成果が得られています。今回の調査ではピットなどの遺構が見つかりました。

今回刊行したこの報告書が、長浜市の歴史や埋蔵文化財をより深く理解していただくうえで、幾分でもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の円滑な実施にご理解とご協力をいただきました地元の方々、ならびに関係機関に対しまして厚くお礼を申し上げます。

平成 25 年 3 月

長浜市教育委員会

教育長 北川 貢造

例 言

1. 本書は、平成 24 年度に長浜市教育委員会が実施した、長屋住宅新築工事に伴う長浜市室町地先に所在する室遺跡第 72 次発掘調査報告書である。
2. 本調査は、長浜市教育委員会が民間事業者からの依頼を受け実施したものである。
3. 試掘調査、本発掘調査並びに整理調査は池寄が担当した。
4. 本書で使用した方位は磁北、高さは東京湾平均海面高度、遺構埋土等の土色については標準土色帖に基づいている。
5. 本書の執筆および編集、遺物写真撮影は池寄が行った。
6. 遺物や写真、図面等については、長浜市教育委員会が保管している。
7. 本調査の実施にあたり、地元の方々並びに関係機関のご協力にご理解をいただいた、記して謝意を申し上げる。

目 次

序文・例言・目次

第1章 調査の経過	1	第3章 調査の方法と成果	6
第1節 調査にいたる経緯	1	第1節 調査の方法	6
第2節 発掘作業の経過	1	第2節 層序	6
第3節 整理作業の経過	1	第3節 調査の成果	7
第2章 遺跡の位置と環境	3	(1) 遺構	7
第1節 地理的環境	3	(2) 遺物	11
第2節 歴史的環境	4	第4章 総括	12

表目次

第1表 土色・土質一覧表	6
--------------	---

挿図目次

第1図 調査区位置図	1	第7図 調査区平面・断面図(S=1/80)	7
第2図 試掘トレンチ配置図および柱状図	2	第8図 遺構断面図1(S=1/20)	8
第3図 長浜市の位置	3	第9図 遺構断面図2(S=1/20)	9
第4図 長浜市周辺の地形	3	第10図 遺構断面図3(S=1/20)	10
第5図 周辺遺跡図	4	第11図 遺構断面図4(S=1/20)	11
第6図 トレンチ配置図	6		

図版目次

図版一 調査前状況(東から)	図版三 作業風景(北から)
重機掘削状況(北から)	遺構完掘状況(西から)
図版二 遺構検出状況(西から)	図版四 遺構完掘状況(東から)
遺構検出状況(東から)	調査区全景(北東から)

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

本調査は、長屋住宅新築工事に伴う本発掘調査である。

平成24年9月4日に原因者より発掘届の提出があり、平成24年10月4日に室遺跡第72次調査として、調査対象区域741.95㎡に対して5箇所の試掘トレンチを設定し試掘調査を実施した。調査の結果、3箇所のトレンチから遺構を確認した。

試掘調査の結果をもとに、原因者とその保存について協議を行った結果、明確な遺構が検出された範囲約123㎡について、本発掘調査を実施することとなった。

本事業の調査主体は長浜市教育委員会である。調査体制は以下のとおりである。

長浜市教育委員会	教 育 長	北川 貢造
	教育部長	
教 育 総 務 課	課 長	中井 正彦
文化財保護センター	所 長	森口 訓男
	副 参 事	黒坂 秀樹
	主 幹	池寄 陽一（調査担当）
	主 査	沢村 治郎（調整担当）



第1図 調査区位置図

第2節 発掘作業の経過

本発掘調査は、平成24年11月19日から12月4日にかけて実施した。

作業工程は、重機による遺構面直上までの掘削、人力による遺構検出作業、遺構の半裁、遺構完掘の順で行い、図面作成などのデータ収集、および記録写真撮影は工程ごとに行った。

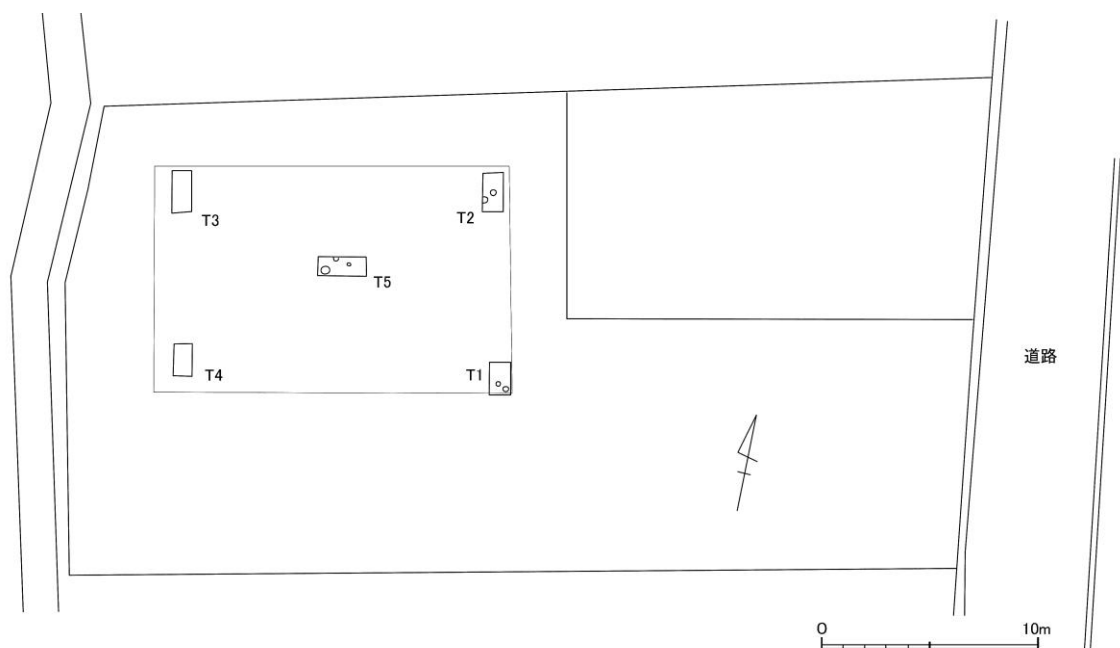
個々の作業の詳細については、第3章 調査の方法と成果で述べることとする。

第3節 整理作業の経過

整理作業は、現地発掘作業終了後から、平成25年3月までの期間内で実施した。

出土した遺物は、全て遺物台帳に記入したが、今回の調査では細片が少量出土したのみで、図示できる遺物がなかったため、報告書に掲載したものはない。

現地で実測した図面等は全てデジタルトレースを行い、必要に応じて編集を行った。



T-1	T-2	T-3	T-4	T-5
0.00m～0.20m ①	0.00m～0.17m ①	0.00m～0.15m ①	0.00m～0.24m ①	0.00m～0.15m ①
0.20m～0.35m ②	0.17m～0.43m ②	0.15m～0.42m ②	0.24m～0.58m ②	0.15m～0.37m ②
0.35m～0.55m ③	0.43m～0.53m ③	0.42m～0.50m ⑥	0.58m～0.64m ③	0.37m～0.42m ③
0.55m～0.70m ④	0.53m～0.70m ④	0.50m～0.54m ③	0.64m～0.72m ④	0.42m～0.57m ④
0.70m～ ⑦	0.70m～ ⑤	0.54m～0.60 ④	0.72m～ ⑤	0.57m～ ⑤
		0.60m～ ⑤		

①10YR3/2 黒褐色極細粒砂
②10YR3/1 黒褐色粗粒砂混極細粒砂
③10YR4/2 灰黄褐色シルト
④10YR2/1 黒色シルト
⑤2.5Y5/1 黄灰色シルト(地山)
⑥2.5Y3/1 黒褐色粗粒砂
⑦2.5Y5/4 黄褐色シルト(地山)

第2図 試掘トレンチ配置図および柱状図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

滋賀県の北東部に位置する長浜市は、市域の北東部に急峻な伊吹山地が広がり、滋賀県と岐阜県との県境をなす脊稜部が金糞岳（標高 1,317m）から伊吹山頂上（標高 1,377m）に続く。

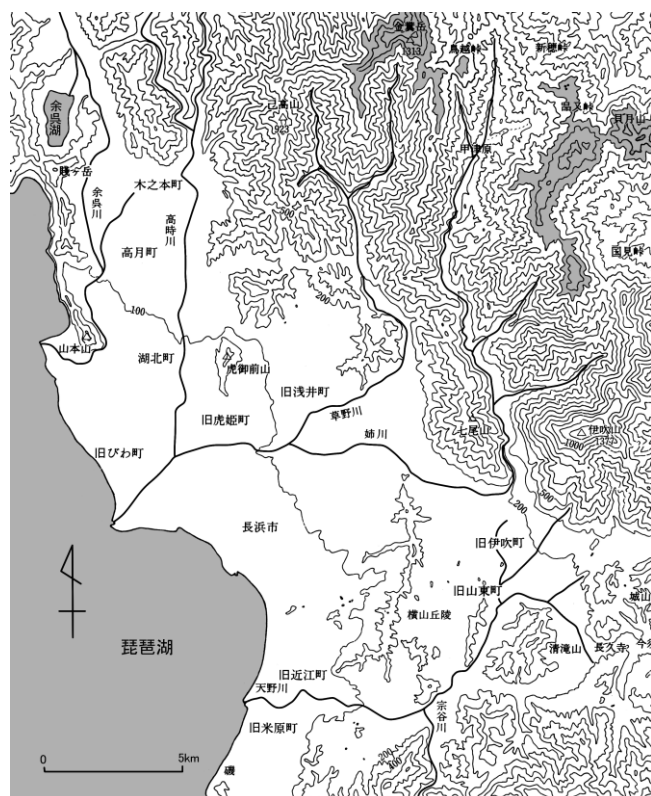
この山地を源流とする姉川、草野川、高時川、余呉川などが南北の谷を発達させて南流し、琵琶湖との間に各河川の平野部が連合して幅 5 から 7 km の湖北平野を形成している。

低地と山地との境界は、断層運動が繰り返されて形成された断層崖となっている。巨視的にみると北西から南東方向の直線状をなし、敦賀湾伊勢湾線の一部を構成する柳ヶ瀬断層や関ヶ原断層などの大規模な活断層に一致する。河川はこの断層崖を浸食し、その前面に山地から運搬してきた土砂を谷口から放射状に堆積して扇状地性の平野を形成している。すなわち、北から余呉川、高時川、東から姉川と草野川、南端に天野川が流れ、これらの堆積作用によって平野が形成されている。また、南東部には平野の中央に多数の孤立山塊分布する複雑な地形が見られる。これらは山東低地と呼ばれ、関ヶ原低地帯の西部にあたっている。

気候は、瀬戸内海式気候に属しており、最高気温は滋賀県南部の大津と比べて大差ないが、最低気温は日本海の湿り気を含んだ冬の季節風が琵琶湖を通り、直接伊吹山に突き当たるのでかなり低くなるといった、日本海側の気候と同じ特色を持っている。



第3図 長浜市の位置



第4図 長浜市周辺の地形

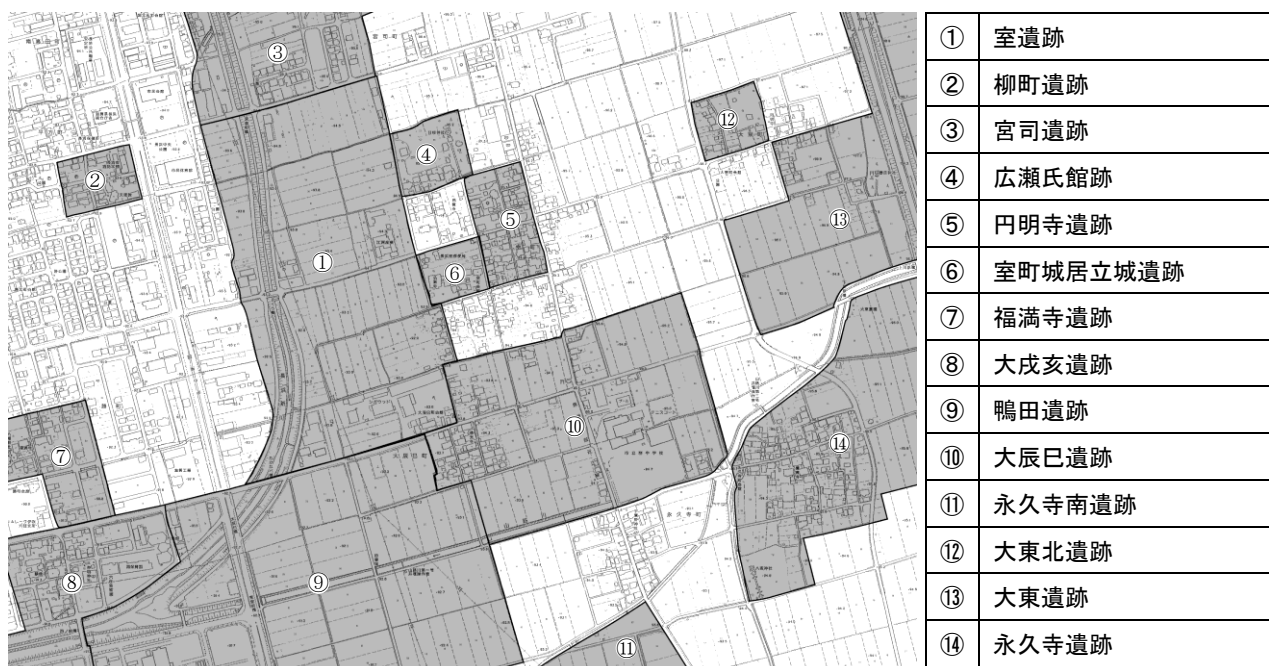
地質は古生層で、約 2 から 3 億年前の海底に堆積した固い地層からできており、特に平野部では砂岩系や粘板岩が分布している。

市域は東西約 25 km、南北約 40km、琵琶湖を含めた総面積 680.79 km²で、人口は平成 24 年 12 月 1 日現在で 44,350 世帯、123,957 人である。

また、市内には JR 北陸本線や、北陸自動車道、国道 8 号線、国道 365 号線が走り、近畿、東海、北陸圏域の交通の結節点として重要な位置にあたる。

歴史的に見ても、北国街道、北国脇往還、塩津街道等の古代からの幹線道路がはしり、古くより交通の要衝として栄え、文化の融合する地域として知られている。

第2節 歴史的環境



第5図 周辺遺跡図

室遺跡は、長浜市の南西に位置する縄文時代後期から中世の集落遺跡である。滋賀県教育委員会および長浜市教育委員会によって数次の調査が行われており、縄文時代の集落跡や埋甕のほか、多数の掘立柱建物跡が検出されている。

柳町遺跡は集落跡として周知されている遺跡である。縄文時代の遺物が出土したといわれているが、遺構は発見されていない。資料が散逸しているため遺物についても詳細は不明である。

宮司遺跡は室遺跡の北に位置し、縄文時代から平安時代の集落跡として周知されている遺跡である。さらに、後述する大東遺跡に続く第2次坂田郡衙跡と考えられている遺跡である。掘立柱建物跡や土坑のほか、縄文時代の貯蔵穴や流路も見つかっている。

広瀬氏館跡は中世の館跡とされる遺跡である。これまでに発掘調査の記録はなく詳細な時期や遺構の配置などは不明。

円明寺遺跡は寺院跡として周知されている。現在まで本格的な調査は行われておらず詳細は不明であるが、大厳寺・薬師堂・雲門堂など、寺院の存在を伺わせる地名が今も残っている。

室町城居立城遺跡は中世の城跡とされる遺跡である。これまでに発掘調査の記録はなく詳細な時期や遺構の配置などは不明。

福満寺遺跡は四ッ塚町と勝町に所在する。平安時代後期の寺院跡として周知されてきたが、調査の増加にしたがい、遺跡の様子がかなり解ってきている。平成4・5年度の調査では、縄文晩期の土器や弥生前期末の土器が出土している。奈良・平安・鎌倉時代のピット、土坑、溝などの遺構が検出され、須恵器、土師器、灰釉陶器、古銭などの遺物も出土している。

大戊亥遺跡は弥生時代後期から奈良時代前半頃の集落跡として周知されている。昭和63年度に行われた調査では、古墳時代後期から奈良時代前半頃の掘立柱建物と建物群を囲む溝（堀）が検出している。また、古墳時代後期から奈良時代前半頃の掘立柱建物の掘方が1 m前後と大きく柱の太さが30cmを超えるものが7棟以上見つかり注目される。出土遺物には転用硯等が出土しており、首長クラス（郷）の施設と考えられる。弥生時代後期から古墳時代の遺物は自然水路から大多数出土しており、大戊亥遺跡の上流部に集落が存在すると考えられる。

鴨田遺跡は長浜市の南西部、大戌亥町を中心として広がる遺跡で、弥生時代中期から平安時代後期頃の集落跡および墓跡として周知されている。昭和59年度から昭和61年度の調査では、溝および方形周溝墓群や自然流路を検出している。溝および自然流路からは弥生時代中期から弥生時代後期の遺物が大量に出土している。その他生産に関係するものとして玉作りに使用されたと考えられる有溝砥石などがある。

大辰巳遺跡は大辰巳町に所在する。弥生時代の集落跡として周知されてきたが、現在では、弥生時代から鎌倉時代までの遺構や遺物が確認されている。昭和58年度の調査で弥生時代後期の土器を出土している。昭和59年度の調査では、市立南中学校の正門前で2基の方形周溝墓を検出している。さらに、平安時代から鎌倉時代にかけての、掘立柱建物跡も検出している。昭和62年度の調査では、初めて市教委が調査を実施し、大溝を確認している。ここからは、弥生中期の土器を大量に出土し、木製加工品の高杯、鋤先、鍬なども出土している。平成3年度は、市立南中学校のテニスコートを調査し、遺構が東方向へ広がらないことを確認している。平成7年度は、同中学校の武道場予定地を調査し、弥生後期の土器と共に掘立柱建物跡や土壇墓、溝を検出している。平成10年度では、同中学校のプールの北側を調査し、弥生中期の土器が大量に出土し、溝や掘立柱建物跡、沼状遺構を検出している。遺物では、弓、石鏃、磨製石斧、石包丁、管玉、玉砥石などが出土している。

永久寺南遺跡は弥生時代の集落跡として周知されているが、未調査のため詳細は不明である。

大東北遺跡は平安時代の集落遺跡である。平成4年度に長浜市教育委員会が行った調査では大東城に伴う土塁や堀が見つかった。

大東遺跡は室遺跡の東に位置する。昭和48年、北陸自動車道の建設に伴う発掘調査において多数の大型掘立柱建物跡が検出され、宮司遺跡に先立つ第1次坂田郡衙推定地に比定されるに至った。この他、弥生時代の方形周溝墓も検出されている。

永久寺遺跡は弥生時代から平安時代にかけての集落跡として周知されている遺跡である。現在に至るまで大規模な調査は行われていないが、弥生時代の方形周溝墓や掘立柱建物などの遺構が検出されている。

第3章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法

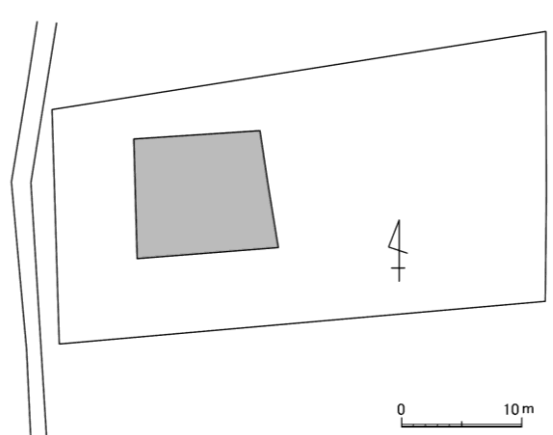
調査は平成24年11月19日から開始し、12月4日まで実施した。東西約11m×南北約10m、面積117㎡の調査区である。

重機を使用して遺構面直上までの掘削を行い、その後人力により遺構検出作業を行った。

基本的な遺構の掘り下げ方法については、ピットは半截して掘削を行い、断面実測および写真撮影を行った後、遺構を完掘した。

全景写真については、遺構検出状況、遺構完掘状況の段階、部分写真については、検出、断面、完掘の時点で、白黒フィルムとリバーサルフィルムを用いて撮影した。

なお、遺構埋土等の土色、土質については、第1表 土色・土質一覧表を参照されたい。



第6図 トレンチ配置図

第1表 土色・土質一覧表

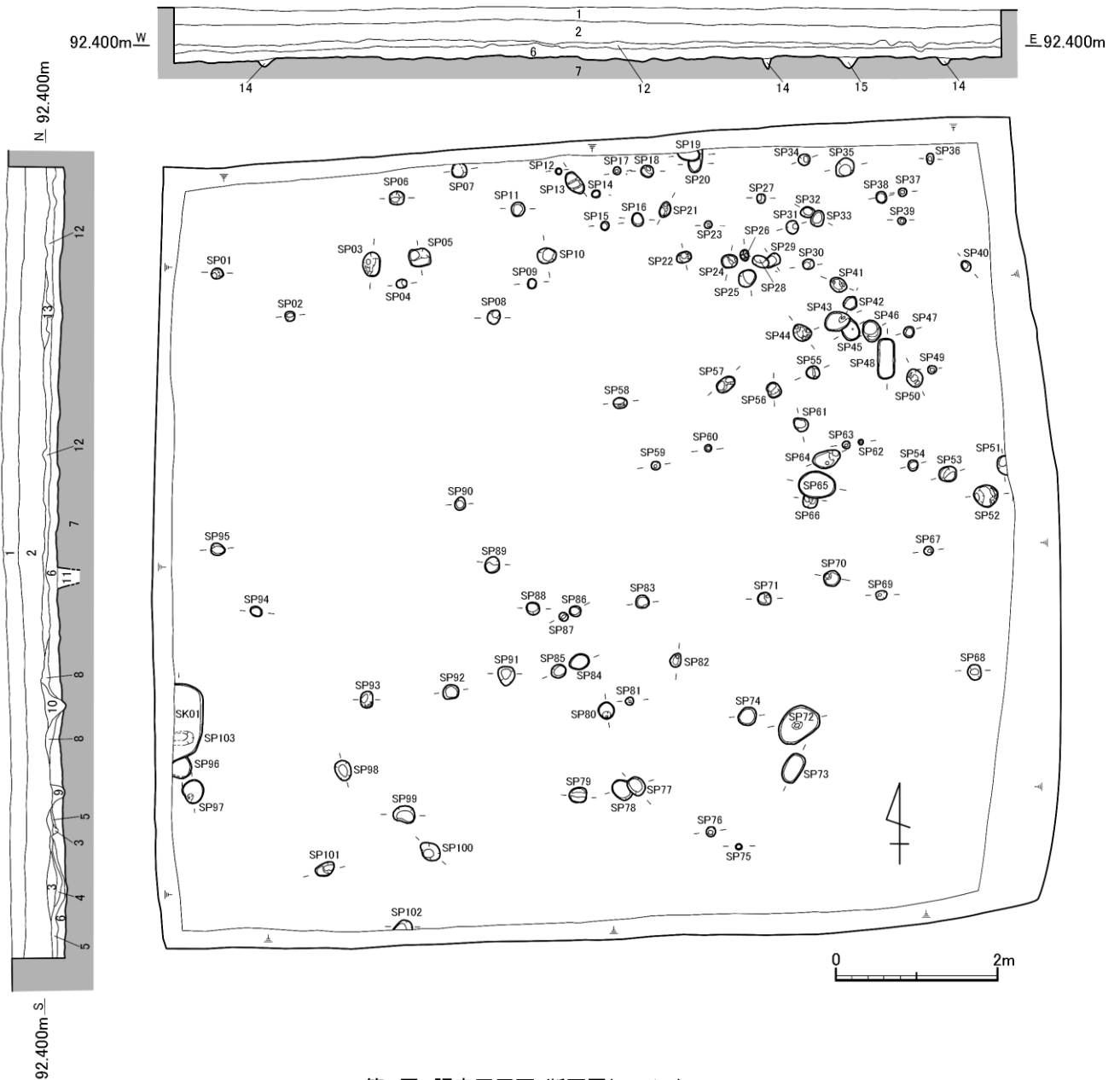
No.	土 色		土 質	備 考
1	10YR3/1	黒褐色	極細粒砂	(耕土)
2	10YR3/1	黒褐色	極細粒砂	粗粒砂混
3	2.5Y3/2	黒褐色	極細粒砂	細粒砂混
4	5Y3/1	オリーブ黒色	極細粒砂	
5	5Y3/2	オリーブ黒色	粗砂シルト	
6	10YR2/1	黒色	シルト	
7	2.5Y5/1	黄灰色	シルト	(ベース)
8	5Y3/1	オリーブ黒色	中粒砂	
9	7.5Y3/1	オリーブ黒色	細粒砂	粗粒砂混
10	2.5Y3/1	黒褐色	極細粒砂	微量細粒砂混(植物遺体混)
11	2.5Y3/1	黒褐色	シルト	
12	10YR4/2	灰黄褐色	シルト	
13	7.5Y3/2	オリーブ黒色	細粒砂	極粗粒砂混
14	2.5Y3/1	黒褐色	粗砂シルト	極細粒砂混
15	2.5Y2/1	黒色	粗粒シルト	

第2節 層序

調査区の土層は基本的に5層からなる。第1層は10YR3/2 黒褐色極細粒砂（耕土）、第2層は10YR3/1 黒褐色粗粒砂混極細粒砂、第3層は10YR4/2 灰黄褐色シルト、第4層は10YR2/1 黒色シルト。第5層以下が2.5Y5/1 黄灰色シルトで地山面である。

第3節 調査の成果

(1) 遺構



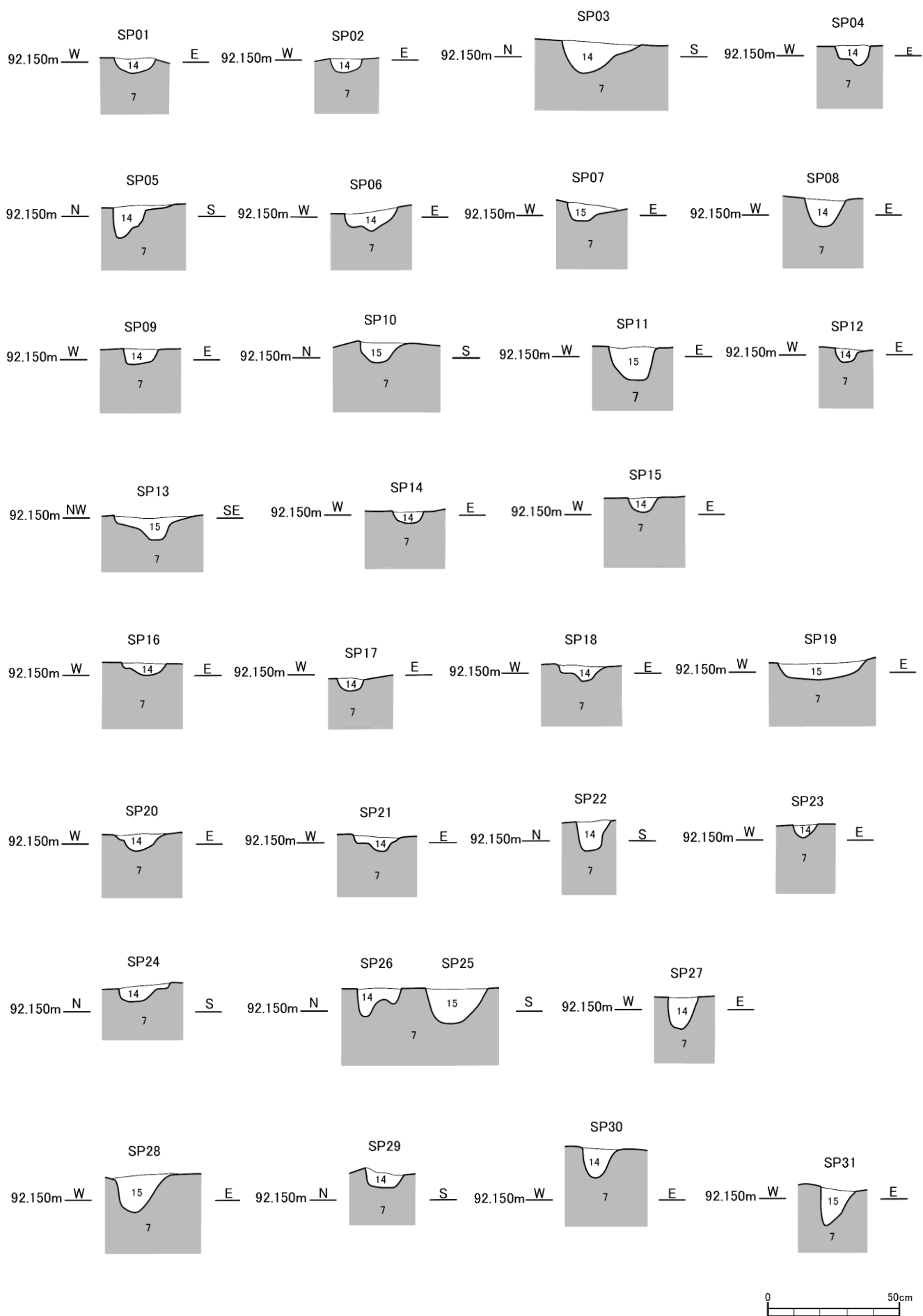
第7図 調査区平面・断面図(S=1/80)

ピット

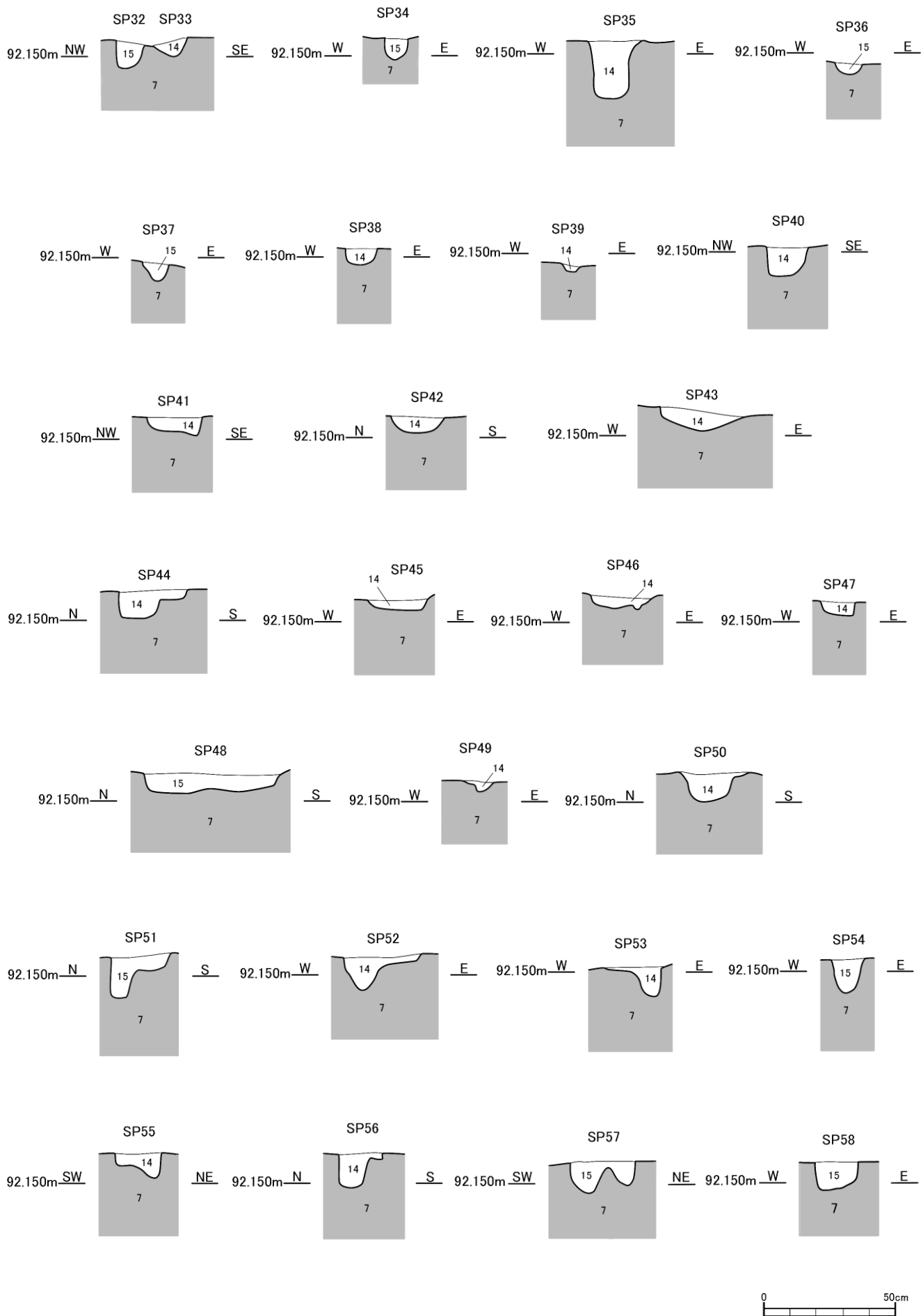
103 基検出した。遺物の出土が無く時期の特定等は困難である。掘立柱建物跡や杭列と考えられる規則的な配置も見あたらなかった。

土坑 (SK01)

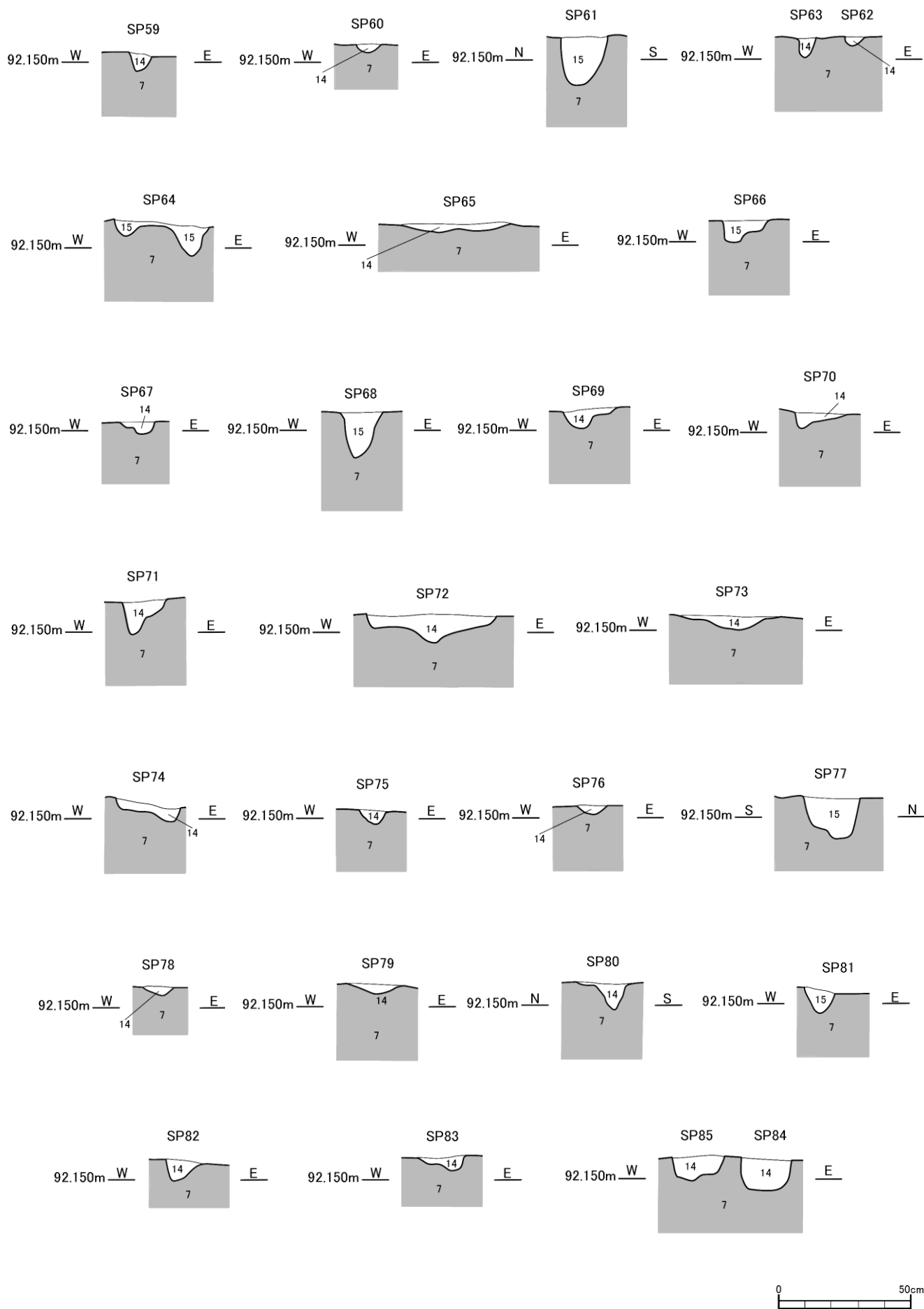
調査区西端から検出したが、調査区西壁面を観察した結果上層からの落ち込みであると判明した。下層からピット 103 が新たに検出されたため、作図等の都合から便宜上遺構番号を割り振ってある。



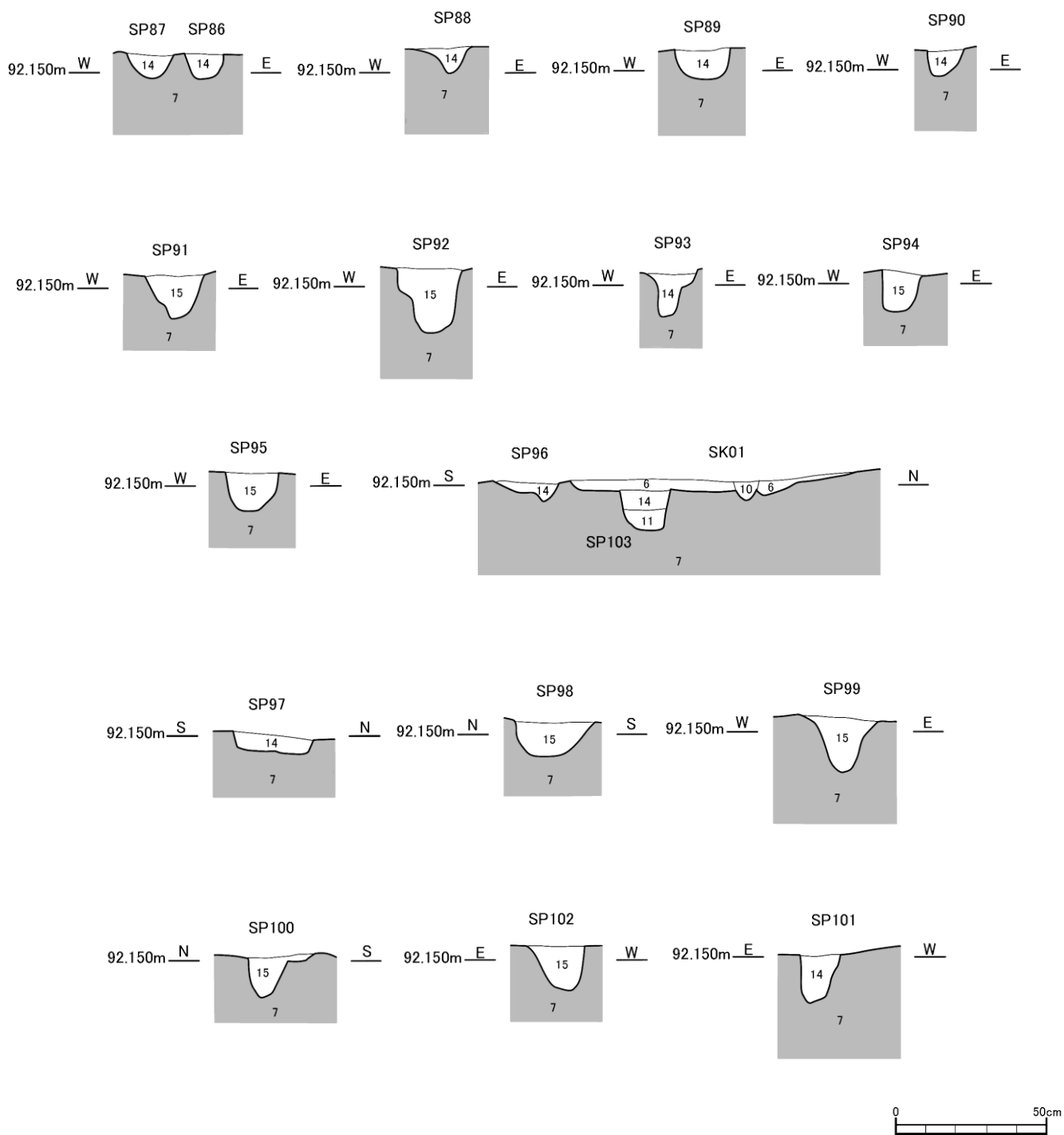
第8図 遺構断面図1(S=1/20)



第9図 遺構断面図2(S=1/20)



第 10 図 遺構断面図3(S=1/20)



第 11 図 遺構断面図4(S=1/20)

(2) 遺物

精査中に土師器と思われる細片が出土した程度で、図示できる遺物は全く出土しなかった。

第4章 総括

今回の調査では多数のピットが検出されたが、遺物が全く出土しなかったため、遺構の時期・性格等を把握することができなかった。周辺調査では中世集落の区画溝などが見つまっているため、それと同時期の集落遺構である可能性も考えられるが、現状では可能性があるとは言えない。今後の調査成果に期待するところである。

参考文献

長浜市教育委員会編『宮司遺跡・十里町（字十五町地区）遺跡調査報告書』第1集 長浜市教育委員会 1977.3

長浜市教育委員会編『宮司遺跡・室遺跡・鴨田遺跡発掘調査報告書』長浜市埋蔵文化財調査資料 第46集 長浜市教育委員会 2003.3

図 版



調査前状況（東から）



重機掘削状況（北から）



遺構検出状況（西から）



遺構検出状況（東から）



作業風景（北から）



遺構完掘状況（西から）



遺構完掘状況（東から）



調査区全景（北東から）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	むろいせきだい 72 じちょうさほうこくしょ						
書 名	室遺跡第 72 次調査報告書						
副 書 名							
巻 次							
シ リ ー ズ 名	長浜市埋蔵文化財調査資料						
シリーズ番号	第 140 集						
編 著 者 名	池寄陽一						
編 集 機 関	長浜市教育委員会						
所 在 地	〒526-8501 滋賀県長浜市高田町 12-34 TEL0749-62-4111						
発 行 年 月 日	西暦 2013 年 3 月						
所 収 遺 跡	所 在 地	市コード	北 緯	東 経	調 査 期 間	調査面積	調 査 原 因
室遺跡 (第 72 次)	滋賀県長浜市 室町地先	25-203	35° 37' 62"	136° 28' 88"	平成 24 年 11 月 19 日 ～ 平成 24 年 12 月 4 日	117 m ²	長屋住宅新 築工事に伴 う発掘調査
所 収 遺 跡 名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項		
室遺跡	集落跡	縄文時代 ～中世	ピット	土師器	特になし		

2013 年 3 月

長浜市埋蔵文化財調査資料 第 140 集
室遺跡第 72 次調査報告書

編集・発行 滋賀県長浜市教育委員会 文化財保護センター
滋賀県長浜市東上坂町 981
TEL0749-64-0395 FAX0749-62-6357

印刷 有限会社 おぎした印刷